

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 91

大原と郷里を潤す出雲井

— まいばら水の歴史② —

古代大原郷の開拓

前回ふれた「出雲井」は、大原郷（大原学区と春照・高番・相撲庭）の一六ヶ村の水田を灌漑する用水で、横山丘陵先端の龍ヶ鼻でさらに郷里井となつて旧長浜市北東部の郷里庄一五ヶ村の水田を灌漑します。さらに、その落ち水の行方などを加えると、旧長浜市域の大半がその影響下にあるという、巨大な灌漑面積を有する井川です。

出雲井開削の由来には二つの話が伝えられています。白雉元年(六五〇)、古来大原郷と呼ばれた肥沃な原野を、出雲島根県の国人大助が多くの入夫を連れてきて開拓し、伊吹山の下に井堰を造り、溝を掘って開拓地を灌漑しました。白雉三年五月一日に完成し、出雲の人が開いたことから出雲井と名づけられました。また、間田の小岡に開拓神・素盞鳴尊を祀る

大梵天宮(現在の岡神社)を建てて、五穀豊穡を祈願しました。

この岡神社の周辺は、米原市内の古墳の密集地のひとつです。境内からは、昭和五九年に石灰岩で構築された横穴式石室を持つ高岡塚古墳が発掘されています。このほか、唐古塚古墳・番庄塚古墳・間田廃社古墳・日御子社古墳(間田)や、皇后塚古墳・皇后塚東古墳(井之口)など、六世紀後半から七世紀初頭の古墳群が、伊吹山から延びる低丘陵上に分布しています。これらの古墳群は出雲井開削に先駆けて、大原野を開いた有力者がいたことを物語るもので、岡神社背後に広がる湧水地の長曾・白谷が重要な役割を果たしていたと考えられます。

中世大原氏による開拓

『大原之郷由来出雲井根元記』(大原郷四ヶ村共有文書)に記された由来は

次のとおりです。宝治二年(二二四八)、近江源氏佐々木氏からわかれた大原氏の始祖・大原重綱が、宇治川の戦いの功績によつて大原郷八千石の所領を賜り、馬淵五郎左衛門尉の援助で本市場に館を構え、その堀の水を引く際に、伊吹村(米原市伊吹)の出雲喜兵衛が、村の坂から姉川の川筋を見立てて、「姉川の大富尻より二、三町ほど下の釜ヶ淵の少し上流に井堰を設けると、大原の城内も百姓も安心して生活できる」と引水したことに始まります。出雲喜兵衛は、この姉川一之井の権利を鎌倉幕府執権・北条泰時から与えられ、用水は出雲井と名づけられました。そして、井水奉行として井元・伊吹に居住しました。

ここでは、大原氏が本市場に居館を築き、その周りの堀に水を引くためにも出雲井開削が必要だったことが記されています。大原氏は、大原郷を灌漑する出雲井の水利を開発し、さらに、出雲井を自らの館の水堀に引き込むことで、用水を掌握する権利をもつ支配者となりました。水利開発と用水管理が大原郷支配の重要な根拠となりました。

出雲井は、大原郷内で分水を繰り返して、烏脇川や野一色川・朝日川

など、山東盆地の森林帯を東西に横切る直線的な人工河川が横山山麓の集落まで用水を届けています。これらの村々には、野一色氏・夫馬氏・烏脇氏・池下氏・竹腰氏(小田)など、大原氏の分家や一族が居館を構え、やはり、館の周りに出雲井から引いた水堀を巡らせていることが、古い絵図などから確認されています。大原氏が支配する出雲井の分配システムを各地に配置された一族に繋げることで、大原郷内全域を灌漑する用水網を確立し、その支配を強化・拡大していったのです。

(歴史・文化財保護室)



▲ 間田五川分水